

尾張における中世初期の瓦当文様について

柴垣 勇夫

はじめに

寺院や宮殿の屋瓦の先端部を飾る軒丸瓦、軒平瓦の瓦当部分には、軒先装飾を目的に、古くからさまざまな文様がめぐらされていた。日本での瓦当文様は、屋瓦が仏教寺院の伝来とともに作られ出したいきさつからして、軒丸瓦においては蓮華文が、軒平瓦においては重弧文や唐草文が、朝鮮・中国の影響を受けながら使用された。特に蓮華文と唐草文のセットは奈良時代、平安時代を通じて最も普遍的な文様として用いられた。

しかし、平安時代後期に至って文様形態に大きな変化が訪れた。11世紀に入り、藤原貴族の摂関政治の最盛期になると、私邸にも瓦葺建物がみられるようになり、貴族関連寺院の改修事業が平安京とその周辺で活発化し、11世紀後半の院政期には、さらに洛内・外において造寺・造宮事業が盛んになった。そしてこの期からしばらくの間、一堂宇に多種多様な文様瓦が使用された。このことは修善の実をあげるのに、質より量の多きを重んじた時代背景を示すものだとされるが、この時期、全国で実に多様な意匠が瓦当文に採用され出したのである。特に洛内東部に建立された六勝寺や、洛西の仁和寺、洛南の鳥羽離宮などには、各国から屋瓦が運ばれていて、各種の文様瓦が認められるのである。各国から京城内外の寺院、宮殿に運ばれた瓦は、西日本を中心に、瀬戸内に面する国々で生産されたものが主体であったが、現在判明しているものは、量的に差がありつつも、筑前・周防・備後・備中・備前・播磨・摂津・讃岐・土佐・淡路・大和（南都系）・丹波・尾張の10数ヶ国にのぼる。これらの国々からの瓦当文は、実に多種類で、不統一であった。^(注1)しかし、中には、各地方での生産瓦を仔細に眺めてみると、各国間に類似した文様瓦を見る場合や、ある地方特有の文様でありながら時間を置いて他地域へ影響をおよぼすものがあったり、さらには、量の多寡を別にして、ある地域では、2世紀近くわたってほぼ連続的に生産されていて、文様の変遷がある程度系統的にたどることができるものがあったりする。^(注2)

こうした平安末期から鎌倉初期にかけての瓦当文様についての分析をしたものに上原真人氏や山崎信二氏の論考があるが、これらに触発されて、尾張産瓦の瓦当文様の変遷とその系譜について、以下に考えてみようと思う。^(注3)

1. 11～12世紀の瓦当文の新意匠

平安京では10世紀初めに、南都では天禄4(978)年の薬師寺の焼失の際に、特定の国々が官営寺院の再建にあたることを義務づけた造寺国の制が朝廷によってとられた。薬師寺では、大和・備前・備後・安芸・播磨・周防・美濃・伊豫・讃岐の9ヶ国が造寺国に充てられたが、実際には伊豫国の瓦が認められるのみで、現実には、寺直営による瓦生産が行われていたと見られている。^(注4)しかし11世紀に入るとこの制度はある程度運用され出し、特に受領層は自らの誇示、地位確保のために積極的に活動した。院政期には更に活発となり、各国で生産された瓦が奈良や京都へ運ばれてくるようになった。もちろん前代からの蓮華文軒丸瓦と唐草文軒平瓦のセットが主流であるが、それらの文様にも新しさが加わり、更に新意匠が登場して、瓦当文様の最もはなばなし時

代を現出するのである。

これら新意匠の出現は、まず丹波におこり、京都周辺（中央官衙系窯と呼ばれる）、播磨、讃岐、大和、尾張へと連鎖反応をおこすようである。11世紀前半代の法成寺建立（藤原道長による）以後、南都・興福寺、京都・平等院、大阪・四天王寺、京都・法勝寺をはじめとする六勝寺などに、さまざまな瓦当文様が飾られたが、こうした文様意匠の誕生の背景には、高麗文化の影響を説く意見もあるが、末法思想の広がった当時の仏教文化と、新興武士階層の出現といった歴史事象と切り離せない。^(注7)

そこで新しい文様形態のいくつかを眺めてみることにしよう。

（1）半截花文（軒平瓦）

軒丸瓦においては、平安時代前期からの蓮華文系統の文様が引続き採用されているが、花卉表現に粗雑さが加わり、単弁、複弁の区別が不明瞭なものが多く作られた。特に新しい文様としては、11世紀中葉代の京都・平等院にみる宝相華文風の装飾弁を採用した重弁六弁花文軒丸瓦程度でなお蓮華文の系統を引継いでいた。^(注8)

これに対し、軒平瓦には、11世紀前半の建立になる法成寺金堂（治安2年—1022年）において、青く葺かれた真珠の瓦があったという「栄花物語」の記載通りの緑釉瓦が法成寺比定地から出土していて、これには四弁花文を半截した半截花文という新意匠の文様が刻まれていた。この半截花文軒平瓦は、ほぼ創建時のものと考えられており、以後、この種の軒平瓦は、丹波・篠瓦窯周辺で生産され、緑釉を掛けることなく平安京へ運ばれた。そしてやゝ文様構成に違いをみせる半截花文瓦が法成寺境内比定地から出土していることから、京都周辺の瓦窯でも焼成されたことが判明している（図1—No.26）。この文様は、1世紀ほどのちの、尾張・知多の瀧谷古窯にも退化した文様構成ながら伝わっている（図1—No.23）。^(注9)

（2）宝相華唐草文（軒平瓦）

半截花文に続いて、11世紀後半代に登場したと考えられる意匠に、均整唐草文の中心飾りとして宝相華文を配したものがある。この中心飾りは五弁の花文であったり、瑞花文であったりするが、丹波産瓦として特徴的なものに、梅鉢状花文（図1—No.24）がある。文様の類似品として尾張国分寺出土の宝相華唐草文軒平瓦^(注10)（図1—No.2）がある。

12世紀前半代に入ると、中心飾りには、花卉を丁寧に表現し、子葉を左右均等に蔓状に配した宝相華文が登場し、金銅製の仏教用具などにみられる彫金文様と類似の構成をもつものが播磨や大和などで作られた。こうした風潮は、やがて尾張にも認められる（図1—No.5, 6）。

（3）扁行忍冬唐草文（軒平瓦）

多様化傾向が顕著になる12世紀前半代には扁行唐草文の形態をとりながら、中心飾りを置かないで途中から左右対照にしたものが登場する（図1—No.28）。先端部は忍冬唐草風に作っているもので、丹波産瓦に特徴的だという。京都尊勝寺で出土していて、高麗の青磁唐草文軒平瓦（全羅南道康津郡大口面沙堂前窯出土）に酷似しており、朝鮮からの直輸入の意匠だとする意見もある。これに端を発すると考えられる扁行唐草文が12世紀中ごろの播磨産瓦^(注11)（図1—No.29）に認められる。この文様瓦も尊勝寺で出土していることから、丹波産瓦の文様意匠が広がりだしたことを示す例であろう。この類似文様が、やはり、尾張・東山窯の中の一基で生産されている（図1—No.10）。^(注12)

ところでこの文様は、高麗青磁瓦と比較してみると、左半分の唐草文の蔓巻き方向に違いがあ

り、必ずしも同一視されるものではない。朝鮮半島では、生産窯で出土しているセットとなる軒丸瓦に牡丹文が使用されていて、しかもこの瓦の使用寺院の建立時期が1157年とされるのに対し、尊勝寺使用のこの軒平瓦が、尊勝寺の創建期に丹波から運ばれたと考えられその年代が12世紀前半と考えられること、朝鮮半島にみられる牡丹文軒丸瓦が焼成された様子はないことから、高麗青磁の軒平瓦文様の直接的な模倣とはいいいきれない。むしろ、仏教関係の金工品にみられる忍冬唐草文からの影響かと思われる。

(4) 巴文(軒平瓦・軒丸瓦)

12世紀中ごろ以降、軒先瓦の文様に巴文が採用され、鎌倉時代以後の軒丸瓦は、全国的に蓮華文にかわって巴文に統一されていく。この文様の出現は、京都周辺の11世紀後半代の唐草文軒平瓦(図1-No.27)に起源をもつという。左右端から派生した蔓唐草が、中心にむかって進む際に、枝葉が大きく渦巻きを描き、^(注13)3葉ずつ集まって、あたかも三ツ巴文を構成するように連続する。この文様の唐草文軒平瓦が京都周辺の瓦窯で生産され六勝寺などで使用されているところから、京都周辺においてやがて(12世紀中ごろ)軒丸瓦にも取り入れられたと考えられているのである。軒平瓦の文様系譜をながめると、一理ある意見であるが、しかし巴文が単一の文様形態であることから、むしろ軒丸瓦にまず出現し、軒平瓦ではこれを連続的にあるいは巴文の間に別の文様を配したりしたものを考案していったと考えた方がより合理的であろう。おそらく衣裳文様や漆工品に円形の紋章風の文様が採用され出した時期に前後して登場してくると思われる。

この文様は、尾張、讃岐産瓦において京都に先がけて登場するが、京都で採用されると一気に各地で作られた。

(5) その他

12世紀中葉代には、宝塔文や文字文が出現し、新意匠が実に多様化するが、12世紀後半代から末葉にかけては、剣頭文が生まれ、軒平瓦に多用され、京都では多くの寺院等で使用された。

2. 尾張における軒先瓦の新意匠

畿内とその周辺に認められた新意匠の瓦類は、11世紀代には各地への影響をみせていて尾張にもそうした影響が認められる。図1のNo.1、2は、尾張国分寺出土瓦であるが、簡略化した蓮華文軒丸瓦や、丹波系瓦にみられた梅鉢状花文を中心飾りとした宝相華唐草文軒平瓦で、^(注14)11世紀代に国分寺周辺で焼成されたものと考えられる。

しかし、12世紀に入ると、瓦陶兼業窯での瓦生産が始まり、地域的特色をもつものが誕生する。そのいくつかを列挙してみよう。

(1) 巴文軒丸瓦・宝相華唐草文軒平瓦

12世紀前半に位置づけられる猿投・東山6号窯からは、水注・三筋壺等の特殊品とともに軒先瓦のセット(図1-No.3、No.5)が出土していて、尾張の瓦が、初期中世陶器の生産と結びついて製作されだしたことを示している。この軒先瓦と同類型のものが同じく東山地区内の八事裏山F窯から出土している。^(注16)(図1-No.6)。

この種の巴文軒丸瓦は、大形で、巴が太く尾長なもので、外区に小粒な珠文を30～33ヶとかなり密に配している。これに伴う宝相華唐草文軒平瓦は、中心飾りに宝相華(や、杏葉風の形態で、七葉文ととらえる意見もある)^(注17)を置き、左右に唐草文を二転させるものだが、一転目の部分

古窯跡、寺院跡等出土瓦(尾張、鳥羽東殿)

関連文様他地方出土瓦(25を除く)



- 1. 2 尾張国分寺(注10)
- 3. 5 東山61号窯(注15)
- 4. 7. 13~16. 19. 20 社山古窯(注5)
- 6. 9. 11. 12 八事裏山古窯(注16)
- 8 萱野古窯(注5)
- 10 植田三七川原(注16)
- 17 上白田古窯(注42)
- 18 濁池北古窯(注5)
- 21 鳥羽東殿(注1)
- 22 大高山古窯(注5)
- 23 奥田滝谷古窯(注5)
- 25 小牧市大山廃寺(注43)
- 24. 26~32 京都出土丹波・播磨産瓦(注1)

0 10 20cm

図1 11~12世紀の尾張産瓦の瓦当文様と関連他地方の瓦当文様

にも宝相華を置く極めて斬新な意匠である。

東山61号窯での生産品や運ばれていった鳥羽離宮東殿の建設時期からみて、ほぼ創建期の12世紀前半代に編年され得る瓦類で、八事裏山窯の生産瓦もほぼ同時期のものと考えられる。

なお、八事裏山C窯では、同じく鳥羽東殿へ運ばれた唐草文軒平瓦(図1-Na9)^(注18)が出土しているが、後述の吉田1・2号窯や社山古窯で焼成された唐草文軒平瓦の文様の蔓状の曲線をや、枝葉風に屈折したものに變形させた意匠のものである。尾張の中で変移した文様であることを示していて、吉田古窯等より後出文様であろう。

(2) 蓮華文軒丸瓦・宝相華文軒平瓦

知多半島北部の地域でも幾つかの軒先瓦を焼成した窯が認められるが、そのうちの一つである社山古窯では多くの種類の瓦が焼かれた。これらには時間的な差があって文様の変化がたどられるのであるが、その初期に生産された瓦当文がこれである。

周縁部の素文縁が部厚な作りで、上面には黄緑色の見事な釉がかかったものがある。この軒丸瓦(図1-Na13)は、京都・法金剛院に運ばれていて、創建期の使用瓦の一つとみられている。^(注19)

1130年の建立であることから12世紀前半の年代が与えられ得る。この軒丸瓦の蓮華文様は、伝統的な複弁蓮華文の形をとりながら、表現方法にそれまでの蓮華文とは大きく異なり、花卉を肉厚に、しかも短かく表現している。そして花卉に重なる子弁が細い陽刻線で丹念に表現している。

これに伴う軒平瓦は、社山古窯で2～3種制作されていて、すべて繊細な表現をした宝相華文(図1-Na14～16)である。このうち、Na15から16へは、文様の退化(簡略化)現象が認められる。社山古窯では、Na19の蓮華文軒丸瓦が続いて制作されているが、これと同種の瓦が熱田神宮寺から出土している(図2-Na2)。これに伴う軒平瓦が杏葉文(図2-Na3)であったことから、社山古窯産の杏葉文軒平瓦(図1-Na20)がNa19の軒丸瓦に伴うものと判断されているが、Na16の宝相華文軒平瓦もNa19の蓮華文軒丸瓦とセットになる可能性がある。

いずれにしても、これら宝相華文軒平瓦は、細部にわたって細かい線刻が施された文様で、他地方にはみられないものである。この文様の構成は、11世紀から12世紀にかけての金属工芸品や漆工芸品に施された文様と酷似しており、特に、金銅製の経箱、金剛盤など仏教用具に酷似文様を見出すことができる。また、制作方法も、金属工芸品にみられる浮彫^(注20)の効果をもたせる鋤彫方法と同一手法で宝相華唐草を作り出した范型を用いており、細部にわたって精巧な表現がとられている。これまでの瓦当文様にはみられない意匠であり、おそらく仏師や金工師などの影響下に尾張で創出されたものと思われる。なお、図1-Na17は知多半島中部の上白田古窯出土瓦^(注42)であるが、10～11世紀頃の小牧市・大山廃寺出土瓦(図1-Na25)^(注43)に祖型を求めることができる。

(3) 宝相華文軒丸瓦

知多半島中央部の濁池北古窯出土の軒丸瓦(図1-Na18)は、京都・神泉苑付近から出土^(注21)していて、京都へ運ばれた瓦の一つであるが、この文様は、11世紀前半代に京都や丹波で作られ、法成寺などに使用された半截花文(図1-Na26)が、11世紀後半代に繊細なものに変化するが、これを外区に配し、内区の花弁を一葉ごとに六弁表現し、宝相華文風にしたものである。細部の文様に中央の影響を認めることができる瓦当文であるが、全体としては尾張特有とみることが可能である。

この濁池北古窯の所在する半田池周辺では同種の軒先瓦が採集されていて、特に京都・仁和寺

南院出土の宝相華文軒平瓦に酷似のものがある。おそらくこの地で焼成されたものが仁和寺関連寺院へ運ばれたものと考えられる。^(注22)これらは社山古窯の宝相華文軒平瓦類と同様、他地方に類例の乏しいものであるが、仁和寺南院出土例には、軒平瓦の宝相華文の一部に半截花文がとり入れられたものがあって、軒丸瓦同様、中央における瓦当文様の影響を受けたことを物語っている。

仁和寺南院の建立時からみて、本軒先瓦類は、1140年前後の制作と考えられ、社山古窯の宝相華文軒平瓦類に比べやゝ時代が下がるものと思われる。

(4) 三巴文軒丸瓦・均整唐草文軒平瓦

社山古窯や吉田1・2号窯で出土している均整唐草文軒平瓦は、京都・鳥羽離宮東殿へ運ばれているもので、1130年頃に制作されたものであるが、これに伴う軒丸瓦は、左廻、右廻の両文様のものがある三巴文(図1-Na4)である。この三巴文も比較的大形で、東山61号窯の制作時期とほぼ同時期とみられ、尾張初現タイプの三巴文といってよいものである。社山・吉田両窯に同じ范型を用いた三巴文が確認されており、両窯ではほぼ同時期に軒丸、軒平瓦ともに焼成され、京都へ運ばれたものと推定される。

均整唐草文軒平瓦(図1-Na7)は、南部・法隆寺に類似文様があるとされるが、平安前期からの均整唐草文軒平瓦の系譜を引いた、唐草文が左右に三反転したタイプの簡略化したものとも考えられる。その後この文様は尾張の地で退化現象をみせながらしばしば継承される。先述の八事裏山C窯出土均整唐草文軒平瓦(図1-Na9)は、この直後のものと考えられ、文様的に退化現象をみせている。吉田古窯瓦等と共に鳥羽離宮東殿で出土している。

(5) 唐草文軒平瓦各類

尾張では、瓦陶兼業窯での瓦生産が12世紀前半代から認められるが、様式的に後出と思われるものが各地の古窯跡や鳥羽離宮東殿から出土している。これらは、12世紀中葉代のものと考えられるが、このグループには他産地の瓦当文様との類似点があげられるものがある。

図1-Na10は、東山窯のうちの植田三七川原所在窯からの出土品で、均整唐草文の中央部分の中心飾りをなくし、扁行風にしたものである。^(注24)この文様構成とはほぼ類似した軒平瓦が京都・尊勝寺から出土していて、12世紀前半代の丹波産瓦とみられている(図1-Na28)。さらに、同じく尊勝寺出土瓦で12世紀前半から中葉代に位置づけられている(図1-Na29)ものもありこちらは、播磨産瓦とみられている。扁行唐草文の左端を右端と均整に作ったもので、Na28の退化文様とみてよい構成のものである。Na10はNa28と文様構成は類似するが、唐草の末端の表現は、播磨産瓦の表現と似る。これは、おそらく、尾張産瓦が京都へ運ばれる中で、丹波、播磨産瓦の文様構成の影響を受け出したことを示しているものと考えられる。

図1-Na21は、尾張における焼成窯の発見はまだないが、鳥羽離宮東殿出土唐草文軒平瓦で、^(注25)尾張産瓦特有の地肌をし、灰釉が瓦当面にたっぷりとかかったものである。東山窯の中の何処かで焼成されたものと考えられるが、この均整唐草文と中心飾りにやゝ違いをみせるが、唐草文の末端の表現に極めて酷似したものが12世紀中葉代の播磨産瓦にあって、京都・尊勝寺から出土している(図1-Na30)。

図1-Na22は、知多半島中央部の大高山古窯から出土している均整唐草文軒平瓦であるが、左右均等に濁巻状の唐草文が配された本例は、12世紀前半代から中葉代にかけての京都尊勝寺出土の播磨産瓦(図1-Na31)や、奈良・興福寺出土瓦や薬師寺出土瓦に類品がある。また、唐草文^(注27)

ではないが、同時期の知多半島産瓦である半截花文軒平瓦(図1-No23)は、丹波や京都系の11世紀代の瓦である半截花文(図1-No26)の文様系譜につながるもので、これらも12世紀中葉代に京都からの影響を受けたものといえることができる。同じ窯で焼かれた三巴文軒丸瓦とともに鳥羽東殿へ運ばれている。

(6) 小形三巴文軒丸瓦・同唐草文軒平瓦

図1-No11、No12はセットで八事裏山F窯で焼成されたものだが、京都・鳥羽離宮東殿へ運ばれている。この種の瓦は、12世紀後葉以降、各地の瓦類が小形化^(注29)していく傾向を示すのと同様、尾張でも小形化をみせるその初期に位置づけられるものである。巴文は、珠文を伴わない三巴であるが、左廻り、右廻り双方が焼成され、ともに鳥羽東殿へ運ばれている。

唐草文軒平瓦は、扁行唐草文で、右端のみが逆方向を示す。同種の小形軒平瓦は、東山61号窯で小破片が出土していて、前段階の巴文軒丸瓦と宝相華唐草文軒平瓦が文様の細部に違いはあるものの八事裏山窯と東山61号窯の両窯で焼成されていたのと同様に、12世紀後半代(第3四半期)にもなお両窯で焼成されていた可能性を示している。

この時期には、京都を中心に巴文軒丸瓦がかなり生産されるが、各地方でもその傾向は強まる。軒平瓦にみられる唐草文も簡略化が進み、図1-No32のような京都・尊勝寺出土の播磨産瓦もみられる。こうした文様の簡素化の影響を尾張の瓦も受けているとみることができよう。

このような中央からの瓦当文様の影響を受けた尾張の瓦は、12世紀末葉代にその転換期を迎える。南都・大和の諸寺院では新しいタイプの蓮華文軒丸瓦(花卉と蓮子の間におしべを表現する)が現われ、文字文瓦も盛行するようになる。また寺院復興に古い形態の大形瓦を葺くようになり、これが各地へ影響をおよぼすようである。

3. 尾張における12世紀末の瓦当文様

(1) 宝相華唐草文軒平瓦

12世紀の末葉、おそらく1180年代に入ると八事裏山C窯を中心に、大形の蓮華文軒丸瓦・宝相華唐草文軒平瓦(瑞花唐草文とも表現される)が生産された(図2-No13、14)。当時の京都や大和の蓮華文瓦の影響を受けつつも極めて整美な複弁蓮華文^(注31)を創出し、セットとなる宝相華唐草文は、前代の東山61号窯や八事裏山F窯で生産された曲線豊かな蔓唐草を模倣した尾張特有の文様構成であった。

この瓦類は、蓮華文が鎌倉市内で2例(図2-No21は千葉地東遺跡^(注32)出土)、宝相華唐草文が伊勢原市コクゾー塚で出土していて、少量の発見例ではあるが、明らかに関東へ運ばれているのである。また熱田神宮境内からも出土^(注33)していて、生産地近隣の寺院にも使用されているものであった。

さらに、この軒丸・軒平瓦の文様構成は、鎌倉市・永福寺において、寺院の近くに作られた瓦窯で生産されたものと考えられる瓦に、ほぼ同一の意匠として採用されている(図2-No22、23)。^(注34)

図2-No16は、瀬戸窯における中世施釉陶器の初期のものと同焼成されていたとみられる軒平瓦で、No15の三巴文軒丸瓦とセットとなる。編年的にはほぼ12世紀最末期に位置づけられ、尾張における前代からの精巧な宝相華文の伝統を受け継いでいるものである。この文様構成の中心飾りには南都・薬師寺などにみられる宝相華文(図2-No28)と類似するものが採り入れられてい

消費遺跡出土瓦(尾張)

古窯跡出土瓦(尾張・三河)

関連文様他地方出土瓦



- 1~3, 6~9 熱田神宮(注35)
- 4, 5 高蔵遺跡(注38)
- 10 犬山二之宮(注35)
- 11, 12 萱野古窯(注5)
- 13, 14 八事裏山古窯(注16)
- 15, 16 釜ヶ洞1号窯(注5)
- 17, 18 塩狭間古窯(注37)
- 19 次廻間古窯(注37) 模式図
- 20 犬山楽田(窯?)
- 21 千葉地東遺跡(注32)
- 22, 23 永福寺境内(注34)
- 24~27 関市坊地瓦窯(注44)
- 28 南都系瓦・法金剛院(京都)(注1)

図2 12世紀末~13世紀初の尾張産瓦の瓦当文様と関連他地方の瓦当文様

て、南都・諸寺院との関連もなお一方に認めることができる。おそらく鎌倉幕府成立と共に南都諸寺院の復興が更に活発化するが、そうした時期に、かつて京都の造寺・造宮に地方瓦が使用されたことと類似の現象があったことを示しているのかも知れない。八事裏山窯の大形瓦はそうした各地へ運ばれるものとして、さらに小形のものには京都や南都の文様瓦を模倣しながら、鎌倉政権と結びつきつつ抬頭してくる地方武士層が信仰対象とした氏寺あるいは神宮寺の屋根を飾るものとして制作されたものと考えられるのである。それは、12世紀後半代までの瓦が地方寺院で使用されている場合は、古代からの歴史をもつ神社の神宮寺に大半が認められる程度であるのに対し、12世紀末葉代のものは、新興の寺院での使用が顕著になることの現象から推定されることである。

さて、宝相華唐草文軒平瓦は、この時期にさらにいくつか生産されていたことが、使用されたとされる寺院出土瓦や瓦窯製品から知られるようになった。図6-Na6~8は寛政8年(1796年)に記録された古瓦譜^(注35)に掲載されている熱田神宮出土の古瓦類であるが、文様構成からみて12世紀末から13世紀初めにかけて、熱田神宮神宮寺において使用された宝相華唐草文瓦とみられる。このうち、Na7、8は、瀬戸窯の釜ヶ洞1号窯出土瓦と類似の、中心に宝相華を、それから髭状の唐草文を左右均整に配した文様構成を示すもので、Na16に比べ退化した文様とみることができる。

Na6は、中心に4弁の花文を置き左右に太い唐草を三反転させた宝相華唐草文を陰刻した瓦当文である。こうした瓦当文が陰刻状に表現されている例は平安時代前期の平安宮使用瓦に、唐草文を二重隆起線の輪郭で表現したのものが、こうした表現法から平安末期の讃岐産瓦や、丹波産瓦^(注36)の陰刻文の型押瓦につながっていく系譜とみられる。尾張では、次に述べる唐草文軒平瓦にも認めることのできる表現法で、文様の系譜からみて、ほぼ12世紀末に編年してよいものと考えられる。この文様意匠は、岐阜県関市の坊地瓦窯出土の軒平瓦Ⅱ類(図2-Na26)に類似する。坊地瓦窯出土のものは、陽刻型押であるが、中心飾りに子房が三角印をもつ四弁花文をおくもので、左右に唐草文を反転させるが、部分的に陰刻風にもみられる文様を配している。熱田神宮出土の本例は、実物が不明で、拓本からのみの判断であるが、中心子房は円形印で、坊地例と若干異なるが、四弁花文を中心にした宝相華唐草文である点で共通する。さらに先述した八事裏山窯出土の同文軒平瓦(図2-Na14)例における四弁花文を中心において左右に唐草文を配することも時代的に12世紀末葉代にこの種の文様意匠が流行することを示しているといえよう。こうした陰刻文様は、後述の図2-Na4、5の高蔵遺跡出土例の観察から、おそらく陽刻瓦当文がまず焼成され、瓦そのものを范型にして陰刻文瓦を制作しているものと思われる。

(2) 唐草文軒平瓦

12世紀代を通して軒平瓦の一般的な文様として採用されていたのは、唐草文である。徐々に文様の簡略化をみせ、端正な均整唐草文は12世紀中葉代に姿を消し、12世紀後半代には図2-Na11、12に見るような、枠いっぱい平凡な曲線で表現された唐草文が描かれた。末葉代にはさらに簡略化して、左右端へむけて均整文の構成をなしているにもかかわらず中心が示されない扁行唐草かと思わせるようなものも登場する(図2-Na18、19)^(注37)。

こうした中で、部厚な唐草を陰刻にした例が最近発掘されている。図2-Na4、5の2点で、ともに熱田神宮の北方にある高蔵遺跡^(注38)から出土している。この2点はそれぞれ范型が異なるが、同文系統の唐草が陰刻状で型押されている。瓦当巾は約19cm、厚さ4.1~4.5cmと小形の部類に

属し、図2—No.11、12の萱野古窯出土唐草文を反転ネガにした文様構成である。型押された唐草の凹部が、平坦になっていることや、外枠の部分に素縁が作り出されている范型を用いていることを示す凹みがあることから、凸状の瓦当文が軒平瓦先端部として作り出され、それに粘土を押し付け軒平瓦を制作しているものと思われる。文様表現は図2—No.6の唐草文部分と類似した部厚な蔓唐草である。

(3) 蓮華文軒丸瓦

12世紀末葉から13世紀初めにかけての瓦当文には、図2—No.9のような剣頭文も出現するが、先にみた、複弁蓮華文軒丸瓦(図2—No.13)の小形化した例も登場する。鎌倉時代を通じて、軒丸瓦はほとんど巴文一色になってしまうが、最後の蓮華文とみることもできるもので、図2—No.10は、二之宮出土と伝えられていることから、犬山市大県神社の神宮寺と考えられる場所の出土品である。同じくNo.20は、やゝ楕円形に歪んだもので、大県神社の北方丘陵端部から出土といわれる。瓦窯跡が存在したものと思われる。本例は、周縁部が先尖り状で、平坦部がなく、外区の珠文も小粒でまばらであって、No.13に比べ後出な文様構成であることを示しているが、蓮華の複弁表現は、なお重厚である。

以上のように、12世紀末葉に至って、文様構成としては数は少なくなるが、小形化現象の中に多種多様な瓦を作り出した。それは、特に軒平瓦に顕著であった。

この現象について以下に若干の考察を加えてみよう。

4. 12世紀末葉における瓦当文多様化の意味

尾張産瓦が、12世紀中葉代に多様化現象みせるのは、京進の結果から新たな文様意匠の伝播を受けて発生したのに対し、12世紀末葉に至って、更に多様化をみせる傾向は、むしろ尾張の中での文様意匠を様々にアレンジして、各地で制作使用したために生まれたものと考えられる。それは、各地での需要の多さがもたらした現象なのであろう。

当時の情勢は、平氏から源氏へ、武家社会の中心勢力が移動する時期で、尾張はその渦中にあった地域であった。

平氏の東国経営の拠点として、尾張国司に平氏の主力が任命されていたのは1160～70年代にかけてで、平頼盛や重衡らが平氏政権維持の地盤を形成していた。これに対し、源氏もまた尾張・三河を重視し、源氏の地盤である東国の西端地域の地盤を確保するために郡司層を介して、鎌倉との結びつきを強めようとする働きかけが1170～80年代にかけ各地で活発化した。こうした中で、平氏政権の結束がゆるみ出す1180年代に入って、尾張は次第に鎌倉政権との結びつきを深めていった。

このころ、尾張・三河に移住し出した源氏の一族たちは、各地に根をおろしだしたという。こうして土着化していった武士層は、各地に、一族の氏神としての神社と、その神宮寺の再建、^(注39)建立に積極的にかかわっていった。それは同時に周辺の窯業地を利用しての瓦制作を実施したことと結びつくものと考えられる。12世紀前半代からの瓦陶兼業窯での瓦生産が引続き行われたのである。

また熱田神宮における各期の瓦使用の事情は、次のような背景があったと思われる。

熱田大宮司職が12世紀中葉代に、それまでの尾張氏から、尾張国目代藤原季範に移ってのち、

藤原氏によって世襲されることとなった。この季範の女と義朝の間に生まれたのが頼朝であるという関係から、熱田大宮司と源氏との結びつきが12世紀後半代に入って深いものとなっていった。それより以前、12世紀前半代においては、藤原一族をはじめ、新興の受領国司層を含めて、院政政権との結びつきが強い段階で、平安京各所で造寺・造宮事業が末法思想とも絡んで活発化していた。こうした造寺・造宮に各地で生産された瓦が運ばれたのは、国司を歴任し財力を蓄積しようとする新興武士層の窯業への介入によったものであった。尾張においてもそのような背景で瓦陶兼業窯での瓦生産があったものと思われる。同時に尾張における古代からの勢力を誇る尾張氏の在する熱田神宮と尾張国司との結びつきもかなりのものであったと思われる。知多半島北部の瓦陶兼業窯で生産された瓦が熱田神宮へ運ばれていることがこれを傍証していると考えられるのである。しかし、12世紀末葉段階に入ると、東山地区・八事裏山窯で焼かれた瓦が熱田神宮で使用され、しかも関東の伊勢原市や鎌倉市で出土していること、鎌倉・永福寺では瓦当文様がそっくり採用されていることなど、尾張と源氏との結びつきが強まったことを示す現象がみられる。このことはまた、尾張の瓦や中世陶器が商品的流通を12世紀前半代に比べ更に活発化してきたことを物語っている。

特に、熱田神宮や周辺の高蔵遺跡から出土した、12世紀末葉と推定される陰陽逆になった瓦当文（陰刻唐草文）の存在は、その系統の瓦を美濃国の中にも認められることから、この文様の伝播が尾張を中心にかなり広汎にあったと推定され、商品流通とも絡み、この時期の武士勢力の動きを示しているものと思われる。

やがて中世都市の形成とともに、神宮寺建立は衰退し、鎌倉仏教の興隆と歩をあわせ遠方からの瓦の搬入はなくなった。瓦専用窯での生産が主体となり、瓦陶兼業窯は消滅するのである。

12世紀末から13世紀初めの短期間に認められる瓦当文様の各種は、基本的には宝相華文と唐草文の軒平瓦の持続、軒丸瓦には巴文使用の普遍化という屋瓦化粧の伝統が当地方には根強く残っていたものと推測される。従って新興武士層の寺院建立に際しての使用瓦には、陰刻にしてまでも伝統の文様瓦を踏襲しようとした意図がみられるのである。

足助町・塩狭間古窯出土の巴文・扁行唐草文軒先瓦のセットや、渥美窯・神ノ釜窯^(注40)出土の唐草文軒平瓦もそうした一連のものと考えられる。京都ではすでに12世紀中すぎから出現した剣頭文や珠文軒平瓦類が、東日本で出現するのは13世紀前葉以降になるようである。静岡県島田市・旗指26号窯は瓦専焼窯で、近くの千葉山智満寺の瓦を焼成したとみられているが、これらも、13世紀代^(注41)に入って、瓦専焼窯へ移っていくその先駆的なものなのであろう。

こうして瓦供給方法は、12世紀から13世紀にかけてみられた窯業地での瓦陶兼業窯生産という方法から、浄土教の変遷と鎌倉政権の変質の中で、大転換されていったものと考えられる。

注1 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」 古代研究 13・14 1978

注2 上原真人「瀬戸内海を渡ってきた瓦」 『大阪湾をめぐる文化のながれ—もの・ひと・みち—』 所収 帝塚山考古学研究所 1987

注3 注1に同じ

注4 山崎信二「大和における平安時代の瓦生産」 奈良国立文化財研究所 学報38冊 研究論集Ⅱ 1980

注5 筆者は以前に尾張産瓦を集成した（「尾張における平安末期の瓦生産」 愛知県陶磁資料館研究紀要 1 1982）が、これにその後の資料を加えて、文様の系譜をみる。

- 注6 注4に同じ
- 注7 注1に同じ
- 注8 稲垣晋也「古代の瓦」日本の美術 66 至文堂 1971
- 注9 注1に同じ
- 注10 稲垣晋也・浅野清ほか「尾張国分寺の発掘調査」『稲沢市史』所収 1968
- 注11 『新羅・高麗美術』韓国美術2. 講談社 1987
- 注12 注1に同じ
- 注13 注1に同じ
- 注14 注10に同じ
- 注15 植崎彰一『愛知県知多古窯址群』愛知県教育委員会 1961
- 注16 名古屋考古学会裏山1号窯調査団「八事裏山1号窯第三次発掘調査報告」古代人43. 1984
「同第四、五次発掘調査報告」古代人47. 1986
- 注17 「同上第四、五次発掘調査報告」古代人47. 1986 および三渡俊一郎「八事裏山1号窯址群出土軒平瓦と同範の瓦出土地について」古代人45. 1985
- 注18 名古屋考古学会裏山1号窯調査団「八事裏山1号窯第二次調査報告」古代人41. 1983
- 注19 中谷雅治「法金剛院境内出土の古瓦」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1970
- 注20 東京国立博物館所蔵・金銅製蓮唐草文金剛盤などに類似文様が認められる。
- 注21 稲垣晋也「古代の瓦」日本の美術 66. 至文堂 1971
- 注22 杉山信三「院の御所と御堂一院家建築の研究」奈良国立文化財研究所学報11冊 1962
- 注23 注1に同じ
- 注24 名古屋考古学会裏山1号窯調査団「八事裏山1号窯発掘調査報告」古代人38. 1981
- 注25 注1に同じ
- 注26 注1に同じ
- 注27 注1に同じ
- 注28 注4に同じ
- 注29 注16に同じ
- 注30 注5に同じ
- 注31 注24に同じ
- 注32 『千葉地東遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告10. 神奈川県立埋蔵文化財センター 1986
- 注33 名古屋考古学会裏山1号窯調査団「八事裏山1号窯第四、五次発掘調査報告」古代人47. 1986
および大正7年発行 愛知県商品陳列館刊『古陶集』に掲載。
- 注34 「史跡・永福寺跡」鎌倉市教育委員会 1982
- 注35 「瓦礫舎古瓦集」朴巖祖淳・寛政8年(1796年)刊
- 注36 注1に同じ
- 注37 『塩狭間古窯』足助町教育委員会 1983. 『長久手町史』資料編3(文化財) 長久手町 1986
- 注38 『高蔵遺跡第3次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会 1988
- 注39 『図説 愛知県の歴史』河出書房新社 1987
- 注40 『渥美半島における古代・中世の窯業遺跡』田原町教育委員会 1971
- 注41 渋谷昌彦氏(鳥田市教育委員会)教示による。昭和60年調査。
- 注42 『上白田古窯址群』常滑市文化財調査報告第16集 常滑市教育委員会 1988
- 注43 『大山廃寺発掘調査報告書』小牧市教育委員会 1979
- 注44 『坊地廃寺跡 坊地遺跡』関市文化財調査報告第12 関市教育委員会 1987